



Q 「友達親子」はいけなと言われますが、大人が子供の目線に降りるのは必要ではないでしょうか？

A 親が子供の目線に「降りたまま」で、場合によっては叱る、諭すことがしにくくなるのが問題です。

子供に嫌われたくない？

「友達親子」について定義があるわけはありませんが、その特徴として「親が子供に権威をもつて接しようとせず、若者の土俵で同じように接すること」

が挙げられます。たとえば、ペアルックの服を着ているので姉妹かと思うと、母親と娘であったり、父親が子供と外に出てゲームに興じているようで、実は父親のほうが熱心であったりとか。「大人げない」と見る人もいれば、仲好きそうでいいと言う人もいるかもしれません。最近はお子さんを叱れない親が増え、子供

に嫌われたくないのがその理由のようです。もしそうなら、こうした親子関係は子供の成長にとって、いいとは言えないでしょう。

子供を叱れる親に

叱ることは、親にとつてもエネルギーのいること。できれば叱らないですませたいところですが、成長過程ではそうとばかりもいきませんね。

友達同士なら関係を損ねたくないの、遠慮したり我慢したりしますが、親は言わなければならぬときがあります。教育の「教」はティーチング、**育**

はコーチングで、相手の話をよく聞き、承認しながら、自発的な行動を促すコーチングとともに、「ならぬものはならぬ」という姿勢（ティーチング）が必要です。

なにも親の「上から目線」を推奨するわけではありません。むしろ幼児期に父親と触れ合ったほうが、思春期の難しい時期にも関係がうまくいくそうです。親子はタテの関係でありながら、ときに子供の目線に降りて「友達の中の友達」になるのは素敵なことです。親子関係が親密すぎる場合は、夫婦関係を見直す必要があります。